

レポート・卒業論文作成のための手引き

第二版

南山大学 人文学部 キリスト教学科
井上淳



2022年1月17日

目次

レポート・卒業論文作成のための手引き	1
1. 本文	1
1-1. 論文の構成	1
1-2. 章と節の構成	2
1-3. 註の必要性	3
1-4. 段落はじめのインデント	3
2. 文献の引用	3
2-1. 文中の引用と別段落での引用	3
2-2. 「 」や “ ” が重複する場合	4
2-3. 丸と点、コンマとピリオドの位置	4
2-4. 語句の省略	5
3. 註番号の位置	6
3-1. 文中に引用する場合	6
3-2. 別段落のブロックで引用する場合	7
4. 引用箇所の表記法	7
5. 引用の際の注意	8
6. 数字の表記	9
7. 略号	9
7-1. 神学関係雑誌の略号	9
7-2. 聖書の略号	9
7-3. 聖書の章と節の表記	10
7-4. よく用いられる略号	10
7-5. テキストの略号	11
8. 註の書式	12
8-1. 註を書く際の注意	12
8-2. 書籍の引用・参照	12
8-3. 雑誌論文の引用・参照	15
8-4. 論文集の中の論文の引用・参照	16

8-5. 辞典の項目の引用・参照.....	17
8-6. 新聞の記事の引用・参照.....	17
8-7. 卒業論文の引用・参照.....	18
8-8. インターネット上の記事の引用・参照.....	18
9. 同じ文献を何度も引用・参照する場合.....	19
10. 文献表.....	20
10-1. 順序.....	20
10-2. 書式.....	21
11. 目次における頁番号の付け方.....	23
12. 第4頁目から頁番号を付ける方法.....	24

レポート・卒業論文作成のための手引き

和文文献の取り扱いについては、南山大学人文学部キリスト教学科発行の『南山神学』〔南山大学図書館所蔵：Z/190/N48〕の形式に準じます。欧文献の取り扱い等については、Kate L. Turabian, *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations*, 9th Edition, revised by Wayne C. Booth, Gregory G. Colomb, Joseph M. Williams, Joseph Bizup, William T. FitzGerald, and University of Chicago Press Editorial Staff (Chicago: The University of Chicago Press, 2018) を参照。

論文の書式・スタイルは、ここで示すものが唯一絶対というわけではなく、論文の種類によって、執筆者の好みによって、あるいは出版社や学術雑誌の編集方針などによって多少異なります。論文作成の際には、指導教員と相談して、あなたの論文にとって最も適切な書式を用いましょう。いずれにしても、文体、脚注、略号などのスタイルは、一つの論文の中で統一されていなければなりません。ここに書式・スタイルの一般的な例を挙げるのは、そのための参考にしてもらうためです。

論文の書式がある程度定まっているのは、その論文を、同じ研究をする者同士が共通に理解し共有することができるためです。学術的な論文として認められるためには、それにふさわしい書式に従って論述する必要があります。論文とは自分だけのものではなく、他の研究者に読んでもらうためのものだからです。研究者たちが自分独自の解釈や、アプローチ、発見などを互いに提示し合い、共有することによって、真理探究の道は進められるのです。

1. 本文

1-1. 論文の構成

論文とは、自分に真実と思われることを主張するための文章です。したがって、何を主張したいのかがはっきりとしていなければなりません。主張は「結論」において述べられます。それゆえ、論文作成の際には、まず自分なりの結論を見定め、そのことを言うために必要な事柄を順番に整理して論文全体の流れを組み立てます。行き当たりばったりで歩いていては目的地に到達できないのと同様に、テキストや資料をただ漠然と読んでいるだけでは、いつまでたっても論文は出来上がりません。

論文作成にあたっては、(1) 自分が何を結論で言いたいのかをまず決めます。そして(2) どのテキストや資料を用いるかを決め、結論を常に念頭におきながら読み、使えそうな箇所をメモしておきます。(3) ある程度論述の材料がそろったら、論文全体の構成を考えます。何をどの順番で述べて結論に持って行くかを考えるのです。そしてできるだけ詳細な目次を書きます。(4) その目次に従って各章の各節を少しずつ書いて行きましょう。こうすることによって、内容の重複や言い洩らしを避けることができます。

まとめて一気に論文を書き下ろすのは、普通の人にはとても無理です。テキストや資料を調べながら、

少しずつ文章にして行くことを薦めます。ゼミでの研究発表をその機会に利用するのが効率的です。研究を進めていくうちに最初の計画を修正するのを感じたら、指導教員と相談の上で修正しましょう。論文の構想を立てる際には、過去の先輩たちの卒業論文や、『南山神学・別冊』〔南山大学図書館所蔵：Z/190/N48〕に掲載されている修士論文を参考にするとよいです。過去の卒業論文はキリスト教学科の資料室に保管されていますので、指導教員に相談して見せてもらってください。

卒業論文の本文は、一般的に次のような構成になります。(頁数はA4の紙を用いてコンピューターで書いた場合のもの)。

- 序文——2頁くらい
- 第1章——10頁くらい (この中に第1節、第2節などが含まれます)
 - 第1節——5頁くらい
 - 第2節——5頁くらい
- 第2章——10頁くらい
- 第3章——10頁くらい
- 第4章——10頁くらい
- 結論——3頁くらい

本文が40～50頁くらいの論文を書く計画を立てるとよいと思いますが、これも指導教員とよく相談してください。

1-2. 章と節の構成

たとえば次のようなスタイルで章と節を組み立てます。スタイルはある程度自由ですが、位置づけが混乱しないように、初めにスタイルを決めておきましょう。(『南山神学・別冊』の各論文の目次を参考にするとよいです)。

例1	例2
序 (or はじめに) I. 南山大学の精神とキリスト教思想 A. キリスト教思想 1. 聖書 a. 共観福音書 (1) マタイによる福音 (i) 種まきのたとえ話 b. パウロの手紙 B. 南山大学の精神 II. 南山大学におけるキリスト教学科 結論 (or おわりに、結語)	序 (or はじめに) 1. 南山大学の精神とキリスト教思想 1-1. キリスト教思想 1-1-1. 聖書 1-1-1-1. 共観福音書 (a) マタイによる福音 (i) 種まきのたとえ話 1-1-1-2. パウロの手紙 1-2. 南山大学の精神 2. 南山大学におけるキリスト教学科 結論 (or おわりに、結語)

1-3. 註の必要性

他の研究者の著作や学術雑誌の論文などを引用あるいは参照する際には、そのつど必ずそのことを註に明記します。言葉をそのままコピーする場合も、自分の言葉で言い換えて用いたりする場合も、必ず註を付けて、その著者と著作名と該当頁などを明示しなければなりません。それを怠ると「盗作」(Plagiarism) になってしまいます。

註を脚注 (footnote) にするか、巻末・章末註 (endnote) にするかは、指導教員と相談して決めましょう。普通は脚注にします。

註は、「 」での直接引用に加えて、パラグラフごとに付けましょう。註の数は多ければ多いほど良いと考えてください。

1-4. 段落はじめのインデント

各段落の文頭は、和文の場合は 1 文字分、欧文の場合は半角 w の 5 文字分下げて書き始めます (Microsoft Word の初期設定のタブ位置で OK です)。

ただし、別段落の引用文 (ブロック引用) では和文・欧文共に文頭は下げません。

2. 文献の引用

文献から言葉をそのまま引用する場合 (直接引用と言います) は「 」に入れます。註には著者と文献名と該当頁などを記します。文献の言葉を自分の言葉で言い換えたり、パラフレーズしたり、要約して用いる場合 (間接引用と言います) は、註に「~参照」あるいは「~を参照」と記します。「 」による直接引用の場合には、註に「~参照」という言葉は不要です。詳しくは「8. 註の書式」(12 頁以降) を見てください。

2-1. 文中の引用と別段落での引用

和文・欧文とも、「 」での引用文は、目安として三行未満の長さのものは本文中に引用し、三行以上の長さのものは別段落でブロック引用します。ただし特に強調したい重要な言葉は、短くても別段落でブロック引用します。

別段落でブロック引用する場合は、

このように、上下の本文から一行空けます。和文の場合は 3 文字分、欧文の場合は半角の w で 6 文字分 (和文の引用と同じ位置まで)、右へインデント (字下げ) します。ブロックで引用する場合は、文頭の文字は下げません。また通常は「 」を付けません (もし「 」を付ける場合は一つの論文内で統一すること)。

欧文の場合も、別段落でブロック引用するときには、基本的に “ ” を付けません。

2-2. 「 」 や “ ” が重複する場合

「 」の中に更に「 」が入る場合は、それを『 』にするのが以前は一般的でした。

(例) 『『神の国は近づいた』と言いなさい』と彼らに言われた。

しかし最近では、書籍名と間違えたり、不要に強調されてしまうことを防ぐために、「 」内でも「 」を用いるのが一般的です。

(例) 「『神の国は近づいた』と言いなさい」と彼らに言われた。

欧文の場合は、“ ”の中に更に“ ”が入る時は、それを‘ ’にします。

(正) It is said in *Sentences*, “memory, intelligence, and will are three ‘powers.’”

(誤) It is said in *Sentences*, “memory, intelligence, and will are three “powers.””

2-3. 丸と点、コンマとピリオドの位置

和文の場合、基本的に文章の最後の〔 〕や〔 ? 〕は「 」の中に入れますが、文章の流れによっては「 」の外に置くことが適切な場合もあります。

(例) 「口に真実、心に誠実。」

(例) 「口に真実、心に誠実。」

(例) 「知ることなしに誰があなたを呼ぶことができるでしょうか？」

(例) 「知ることなしに誰があなたを呼ぶことができるでしょうか」？

欧文の場合、ピリオドとコンマは基本的に引用符の中に入れます。

(正) “Lord,” Peter said, “explain this parable to us.”

(誤) “Lord”, Peter said, “explain this parable to us”.

しかし、コロン (:)、セミコロン (;)、疑問符 (?)、感嘆符 (!) は、基本的に引用符の外に置きます。

(正) John said, “Yes”; then he left the room.

(誤) John said, “Yes;” then he left the room.

(正) Did Paul said, “We are all here”?

(誤) Did Paul said, “We are all here?”

ただし、それが引用語句の一部である場合は、引用符の中に入れます。

(正) He asked, “Who is my neighbor?”

(誤) He asked, “Who is my neighbor”?

2-4. 語句の省略

《和文の場合》

引用箇所の一部を省略する場合は、「……」（三点リーダー 2つ）あるいは〔中略〕を用います。
（ ）（小括弧）ではなく、〔 〕（亀甲括弧）であることに注意。

（例）

「キリスト教は、すくなくともその知識人層において古代宇宙論の伝統を受け継いでいる。……しかし、その継承の過程で、ある種の変更が起こっている。」²⁹

（例）

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。〔中略〕不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。」⁶⁵

ただし、原文の意味が変わってしまうような省略をしてはいけません。

（例）

「山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。」

↓

（誤）「山を動かすほどの……愛がなければ、無に等しい。」

主語や文脈を補う場合は、その語句を〔 〕（亀甲括弧）に入れて挿入します。

（例）

「〔愛は〕すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

（例）

〔第 55 項においては〕聖霊に言及されていないことが目につく。その理由は明らかである。それは、〔ローマ奉献文のように〕聖霊の名を呼ばない *Quam oblationem* と *Supplices* をも包括的にエピクレシスと解釈するからである。

《欧文の場合》

省略には「...」が用いられます。書き方は、word, space, dot, space, dot, space, dot, space, word という具合に、三つのドットと四つのスペースを記します。

（正しい例）

The soul . . . is the first principle of life.

したがって、次の書き方は誤りとなります。

（誤）The soul ... is the first principle of life.

（誤）The soul.....is the first principle of life.

（誤）The soul. . . is the first principle of life.

コンマやセミコロンの後の部分を省略する場合は、次のように、word, comma/semicolon, space, dot,

space, dot, space, dot, space, word という具合に記します。スペースの有無に注意。

(正しい例)

Everything that acts, . . . performs every action from some kind of love.

I hear, and my body trembles; . . . my lips quiver.

コンマやセミコロンの前の部分を省略する場合は、次のように word, space, dot, space, dot, space, dot, space, semicolon, **space**, word という具合に記します。コンマやセミコロンの後にひとつスペースがあることに注意。

(正しい例)

Wherever there is intellectual knowledge . . . , there is also free will.

Rejoice . . . ; give glory to his holy name.

文章の最後を省略して次の文章とつなげる場合は、次のように word, **dot**, space, dot, space, dot, space, dot, **space**, **space**, Word という具合に記します。最後の語の後には、文章の終わりを示すために、スペースではなくドット (.) を打ちます。また次に続く文章のはじめの語 (大文字ではじめる) の前に、文章の切れ目を示すために二つのスペースを置きます。

(正しい例)

The proper object of love is the good. . . . The good is the proper cause of love.

3. 註番号の位置

3-1. 文中に引用する場合

《和文の場合》

本文中において、註の番号は、原則として [、] や [。] の前に付けます。

(正) それゆえ我々の知性は¹、ソクラテスという個別を認識する²。

(誤) それゆえ我々の知性は、¹ソクラテスという個別を認識する。²

「 」が付けられた語句の場合は、通常は「 」の後に付けます。

(正) これは当時「万民の法」²³と呼ばれていた国際法である。

(誤) これは当時「万民の法²³」と呼ばれていた国際法である。

「 」に入れて文章を引用する場合、次の文章がすぐ後に続くときには、註の番号は「 」の中、[。] の前に付けます。

(例)

「徳とは能力の何らかの完全性を名づけて言ったものである⁴⁷。」しかしその完全性は……。

しかし、「 」で段落の最後が締めくくられる場合には、註の番号を「 」の外に置くことができます。(別段落のブロックで引用する場合も同様です)。

(例)

徳とは能力の何らかの完全性を意味している。それゆえAは次のように言っている。「しかるに、今なるものの完全性も、何にもましてその終極との関連において考察される。」⁴⁷

《欧文の場合》

欧文の場合、和文の場合とは逆に、文中において註の番号は原則として「,」や「.」の後に付けます。

(正) In this question,³ Thomas treats the knowledge of angels.⁴

(誤) In this question³, Thomas treats the knowledge of angels⁴.

“ ” で終わる文章の場合も、その後に付けます。

(正) “These,” he writes, “are clearly conceptual distinctions.”⁵⁶

(誤) “These,” he writes, “are clearly conceptual distinctions.^{56”}

3-2. 別段落のブロックで引用する場合

別段落のブロックで文章を引用する場合、註の番号は通常は〔 〕の後に付けます。しかし、一つの論文の中で統一されていれば、〔 〕の前に付けてもかまいません。

(例)

目的は行為の実体に属するものではないまでも、やはりそれは行為者を行為にまで動かすものなるかぎり行為の最も主要な因たるのである。⁸⁷

目的は行為の実体に属するものではないまでも、やはりそれは行為者を行為にまで動かすものなるかぎり行為の最も主要な因たるのである。⁸⁷

「 」を付ける場合も、註の番号は通常は「 」の外に付けます。(段落の最後を「 」で締めくくる場合と同様です)。しかし、一つの論文の中で統一されていれば、「 」の中に付けてもかまいません。

(例)

「目的は行為の実体に属するものではないまでも、やはりそれは行為者を行為にまで動かすものなるかぎり行為の最も主要な因たるのである。」⁸⁷

「目的は行為の実体に属するものではないまでも、やはりそれは行為者を行為にまで動かすものなるかぎり行為の最も主要な因たるのである。⁸⁷」

欧文の場合、註の番号は〔.〕の後に付けます。

(例)

Therefore, it is clear that the intellective principle by which a human being understands possesses an existence that transcends its body and is not dependent upon its body.⁸⁷

4. 引用箇所を表記法

聖書、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、アリストテレス、プラトン、その他のテキストを引

用したり参照したりする場合は、研究者の間で用いられている学術的記述方法に従って、出典箇所をできるだけ詳しく表記します。

(正) アリストテレス『形而上学』第三卷第二章 997a15-25 を参照。

(誤) アリストテレス『形而上学』を参照。

(正) Cf. Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I, q. 89, a. 1, ad 2.

(誤) Cf. Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I.

ただし、ある特定の版のテキストの註や解説などを引用・参照する場合には、該当する頁および註番号を記します。

(例) アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波書店、1968年）634頁、註36を参照。

(例) Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, Blackfriars ed., vol. 12 [I, qq. 84-89], trans. Paul T. Durbin (London: Blackfriars, 1967), 136, note *a*.

ed. は edition の略、qq. は q. の複数の略号です。

trans. は translator あるいは translated by の略であり、翻訳者を示す場合に用います。

5. 引用の際の注意

研究論文から言葉を引用する際には、それが原典において言われていることなのか、あるいはその研究者の解釈なのかを区別する必要があります。たとえばKという研究者がトマス・アクィナスについて次のように書いている場合、

疑いの余地なく正しいことであるが、アクィナスは、個体化なくしてはいかなる現実化もありえないのと全く同じように、現実化なくしてはいかなる個体化もありえないと信じていたし、したがって本質と存在とを本当に区別するという事は理解しがたいこと、あるいはいくらよく見ても意味のないことではないのかとも考えていた。¹

これをそのままトマスの見解として引用してはいけません。これはこのKという研究者の解釈であり言葉だからです。このような場合は、「Kによれば」あるいは「…とKは言う」という表現を用いて、Kの見解として引用・参照します（Kの著作の該当する頁を出典として註に記します）。

トマスの見解として引用するためには、この研究者が参照しているトマスの著作の箇所を自分自身で調べて確認し、トマスの言葉を直接引用・参照します（この場合はトマスの著作の該当箇所を註記し、必要ならば、その研究者の著作の該当箇所を「参照」としてその後に記します）。

(例)

¹ ちなみにこの文章は、A. ケニー『トマス・アクィナス』高柳俊一・藤野正克訳（教文館、1996年）、p. 118より〔一部省略〕。

³⁵ Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 14, a. 9, cor. を参照。また、山田晶『トマス・アクィナスのレス研究』（創文社、1986年）、489頁を参照。

※ 論文作成の初期段階では、テキストを自分の言葉で言い換えたり要約したりすることは少なめにし、できるだけ原文をそのまま「 」でコピー引用しておくことを薦めます。後になって、その部分のテキストの内容を再確認する必要がある時に便利です。引用しておいた原文をパラフレーズしたり要約したりして「参照」に変更するのは、後で簡単にできることです。

6. 数字の表記

年や頁などの数字を省略して記す場合には、次の規則に従います。

最初の数字	最後の数字	表記例
1桁～2桁の場合	省略せずに表記する	3-10, 71-72, 96-117
下2桁が00の場合	省略せずに表記する	100-104, 600-615, 1100-1123
下2桁が01～09の場合	下1桁あるいは2桁以上の変化している部分だけ表記する	107-8, 505-17, 1002-6, 123-25, 1234-35
下2桁が10～99の場合	下2桁あるいは3桁以上の変化している部分だけ表記する	321-25, 415-532, 1960-65, 1496-504 14325-28, 11564-78, 13792-803

従って、たとえば次のようになります。

(誤) 27-8 → (正) 27-28 と表記する。

(誤) 356-9 → (正) 256-59 と表記する。

(誤) 495-498 → (正) 495-98 と表記する。

(誤) 302-08 → (正) 302-8 と表記する。

7. 略号

7-1. 神学関係雑誌の略号

神学関係の欧文の学術雑誌・論文集の略号は、次のもの（通称 TRE）を利用できます。

Schwertner, Siegfried M. ed. *Theologische Realenzyklopädie: Abkürzungsverzeichnis. 2., Überarbeitete und erweiterte Auflage.* Berlin: Walter de Gruyter, 1994. [南山大学図書館所蔵：R/191/1236-A/A]

7-2. 聖書の略号

聖書の略号（略語）は、和訳の場合は『新共同訳 聖書』の略号を利用でき、英語の略号を使う場合は、

Revised Standard Version (RSV) の略号を利用できます。たとえば次の書籍に記載されています。

『聖書——新共同訳 旧約聖書続編付き』（日本聖書協会、1994年）。

『聖書——聖書協会共同訳 旧約聖書続編付き』（日本聖書協会、2018年）

The Holy Bible Contains the Old and New Testaments, Revised Standard Version, Catholic Edition (San Francisco: Ignatius Press, 1966).

7-3. 聖書の章と節の表記

註における聖書の章と節の表記は、たとえば次のようなスタイルにすることができます。

(例1) 1テサ 5: 17 1 Thess. 5: 17-18

(例2) マタ 7, 24 Mt. 7, 24-29

(例3) 創 25. 19 Gen. 25. 19-37

7-4. よく用いられる略号

Cf. — 「参照せよ」。これは、本来はラテン語 *confer* 「比較せよ」の略号で、厳密に言えば「～を見よ」(see) とは異なりますが、「参照」の意味で一般に用いられています。

ed. — 「編集者 *editor*」を示す場合と、「版 *edition*」を示す場合があります。

etc. — 「～など」。

ibid. — 「同箇所」、「同上」。すぐ前に挙げた箇所と同箇所あるいは同書であることを示します。

idem — すでに *ibid.* が用いられている中で、同じ著者の別の著書を挙げる際に著者名を省略する時に用います。略語ではないので [.] が付かないことに注意。

(例)

³⁵ Joseph Owens, *Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics*, 3rd ed. (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1978), 109.

³⁶ *Ibid.*, 151; cf. *idem*, *Elementary Christian Metaphysics*, 273.

loc. cit. — 「同箇所」。既に引用・参照した箇所であることを示します。

op. cit. — 「前掲書」。既に引用・参照した文献であることを示します。

loc. cit. と op. cit. の場合は、著者名（姓）のみを記すだけでよいです。

(例) ¹⁸ Elders, loc. cit.

(例) ¹⁴ Cf. Le Goff, op. cit., 216.

loc. cit. と op. cit. は、ある著者の著作を一つしか用いていない場合に、以前はよく使われていましたが、前掲されている場所がはるか離れていたり、うっかり同著者の複数の著作を用いたり、場合によってはどこかに消えていたりして、見つけ出すことが困難なことがあるため、現在はあまり用いられない傾向にあります。代わりに、省略された題名がよく用いられます。

(例)

稲垣良典『神とは何か：哲学としてのキリスト教』（講談社、2019年）12頁参照

↓ (次回の参照から)

稲垣『神とは何か』24頁参照

p. - 「頁」。複数頁は、pp. と表記します。(例: pp. 56-60)

passim - 「至る所に」。章や節のあちこちに何度も出てくる場合に用います。

[sic] - 「ママ」。原文に誤字があると思われる場合、その語の直後に付記します。

s. v. - 辞書の項目を参照する場合に用います (ラテン語 *sub verbo* の略)。

trans. - 「翻訳者 translator」を表します。

vol. - 「巻 volume」を表します。

7-5. テキストの略号

頻繁に用いるテキストは略号で示すことができます。最初に引用・参照した際に、〔以降は～と略記する〕あるいは〔以下～と略記〕と付記します。

(例)

³ Thomas Aquinas, *Summa theologiae* [以下 ST と略記] I, q. 89, a. 1, ad 1 を参照。

⁴ John Damascene, *De fide orthodoxa* [以下 DFO と略記] II, 12, c. 26, v. 58-59.

※ *Summa theologiae* (『神学大全』) の「第一部」は I (prima)、「第二部の一」は I-II (prima secundae)、「第二部の二」は II-II (secunda secundae)、第三部は III (tertia) と略記されます。「第二部の一」が II-I でないことに注意。

トマス・アクィナスの著作箇所を表記には次の略号がよく用いられます。

a. - articulus 項

adn. - adnotatio 註

arg. (あるいは obj.) - argumentum / objectio 異論

c. (あるいは cap.) - capitulum 章

cor. - corpus 主文 (解答)

d. - distinctio 区分

lec. - lectio 講

q. - quaestio 問題

qla. (あるいは qa.) - quaestiuncula 小問題

使用する文書の略号を、はじめにまとめて註に挙げておくこともできます。

(例)

¹ 本稿の註においては、トマス・アクィナスの著作に次の略号を用いる。InDA (*Sententia Libri De anima*); QDA (*Quaestiones disputatae De Anima*); QDQ (*Quaestiones de quodlibet*); QDV (*Quaestiones disputatae de ueritate*); SCG (*Summa contra Gentiles*); SSS (*Scriptum super libros Sententiarum*); ST (*Summa theologiae*).

略号で使用する文書が多数の場合は、略号表を目次の後に記載することもできます。

※ トマス・アクィナスの著作のラテン語の題名は、最初の語と固有名詞を大文字にする以外は小文字で表記することが多いです。題名の表記の仕方は研究者によってさまざまです。どれかひとつを選ぶとすれば、現在のところは、トレルの次の著作に記載されている著作目録の表記を用いることがおそらく最も適切ではないかと思います。Torrell, Jean-Pierre, *Initiation à saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son œuvre*, 2^e édition (Paris: Editions du Cerf, 2002), 483-525. [南山大学図書館所蔵：AH5/-016012]。

英訳もあります。Torrell, Jean-Pierre, *Saint Thomas Aquinas, vol. 1: The Person and His Work*, trans. Robert Royal, Revised Edition (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 2005), 330-61. [南山大学図書館所蔵：AH5/-016593]

日本語訳も出ました。J.-P.トレル『トマス・アクィナス：人と著作』保井亮人訳（知泉書館、2018年）[南山大学図書館所蔵：132K/2409]

8. 註の書式

8-1. 註を書く際の注意

直接引用の場合（文献の語句をそのまま「 」に入れて書き写した場合）は、「～を参照」という言葉は書きません。直接引用ではなく間接引用の場合は「参照」あるいは「～を参照」と書きます（言葉をパラフレーズして言い換えたり、要約したり、情報をそこから得たり、関連した事柄がそこに書かれている場合などです）。

※ Ibid.あるいは「同上」は、論文作成の最終段階までは使用しない方がよいです。文章の切り貼り作業で参照箇所がいつのまにか行方不明になってしまうのを避けるためです。

8-2. 書籍の引用・参照

《和書の場合》

和書は次の順序で記載します。①著者・編者の名前、②『書名』、③訳書の場合は訳者の名前、④改訂版ならば何番目の版か、⑤（出版社、出版年）、⑥引用・参照した頁。

（例）田川建三『イエスという男』第二版（作品社、2004年）179-80頁。

（例）ヤロスラフ・ペリカン『聖母マリア』関口篤訳（青土社、1998年）42頁参照。

複数の出版年が書かれている場合、もし改訂のない単なる再版ならば第一刷の発行年を記します。

訳書の場合、改訂版については、それが原書の改訂版ならば訳者の前に記し、訳書の改訂版ならば訳者の後に記します。

（例）

ダヴィド・フルッサー『ユダヤ人イエス』決定版〔改訂第二版〕、池田裕・毛利稔勝訳（教文館、2000年）、143頁参照。

デンツィンガー・シェーンメッツァー編『カトリック教会文書資料集』A.ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、改訂版（エンデルレ書店、昭和63年）439頁、2886を参照。

編集された訳書の場合、原書の著者名ではなく編訳者の名前を挙げる方が適切なこともあります。

（例）

山田晶編訳『世界の名著』20「トマス・アクィナス」中公バックス（中央公論社、昭和55年）338頁、註4。

頁の表記には p. を用いることもできます。複数頁は pp. と表記します。

（例）

鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』（新世社、2002年）、pp. 88-89 参照。

頁の表記にはその他、「～」や全角数字を用いて次のように表記することもできます。（ただし、どれかに統一すること）。

（例） pp. 88～89.

（例） 88～89頁。

《洋書の場合》

洋書は次の順序で記載します。①著者・編者の名前（名前・苗字の順番で書く。編者の場合は ed. を後に付けます）、②書名（イタリックにします）、③シリーズのひとつならばそれを記します、④改訂版ならば何番目の版かを記します（たとえば、4th ed.）、⑤訳書の場合は訳者の名前（trans. を前に付けます）、⑥（出版地：出版社、出版年）、⑦引用・参照した頁（p. は必要ありません）。

洋書の場合、「註」の中と「文献目録」の中では書き方が異なるので注意しましょう。（たとえば註では、ピリオドではなくコンマで、項目が区切られます）。

（註の場合の例）

⁷⁶ Etienne Gilson, *Being and Some Philosophers*, 2nd ed. (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1952), 98-99.

題名と副題の間にはコロン [:] を付けます。

書名は、副題を含めてイタリックにします。

（例）

²² Ralph McInerny, *Aquinas on Human Action: A Theory of Practice* (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 1992).

出版地（都市名）がどこなのか分かりにくい場合は、所属する州や国の名前を付記します。

（例） Washington, DC St. Bonaventure, NY Saga, Japan

シリーズの名はイタリックにしません。

(例)

⁷⁸ John F. Wippel, *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*, *Studies in Philosophy and the History of Philosophy*, vol. 10 (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 1984), 19-20.

Vol. が付いていても、それが副題とみなされる場合には、イタリックにします。ただし vol. の部分はイタリックにしません。(下の例を参照)

翻訳書の場合、セミコロンに続けて [originally published as ~] という表記で、原書の出版地、出版社、出版年を記します。

(例)

⁷⁷ Jean-Pierre Torrell, *Saint Thomas Aquinas*, vol. 1: *The Person and His Work*, trans. Robert Royal, Revised Edition (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 2005); originally published as *L'Initiation à Saint d'Aquin: Sa personne et son œuvre* 2^e édition (Paris: Editions du Cerf, 2002), 175.

「参照」の場合は、Cf. を用いることができます。Cf. の代わりに「～を参照」と日本語で記すこともできます。あるいは何も記さなくても OK です。“ ” の有無で引用か参照かの区別は可能だからです。

(例)

⁵⁹ Cf. Robert Pasnau, *Thomas Aquinas on Human Nature: A Philosophical Study of Summa theologiae Ia* 75-89 (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), 413, note 25.

⁶⁰ Naomi Reed Kline, *Maps of Medieval Thought: The Hereford Paradigm* (Suffolk, UK: The Boydell Press, 2001), 43, Fig. 1.24 を参照。

⁸⁷ Andrew Louth, *The Origins of the Christian Mystical Tradition from Plato to Denys* (New York: Oxford University Press, 1981), 33.

著者と別の人が編纂した著作集に含まれるもの場合は、第何巻目かを [vol. ~ of] という仕方で示し、著作集の名もイタリックにします。そして、ed. を付けて編者 editor を記します。ed. の位置に注意。この場合は編集者の前に付けます。

(例)

²⁰ Cf. Bernard Lonergan, *Verbum: Word and Idea in Aquinas*, vol. 2 of *Collected Works of Bernard Lonergan*, ed. Frederick E. Crowe and Robert M. Doran (Toronto: University of Toronto Press, 1997), 226-27.

再版されたものの場合、最初の出版年の後に、[; reprint,] をつけて、再版されたものであることを示します (単なる重刷の場合は最初の出版年だけ記せばよいです)。別の出版社から再版されている場合は、最初の出版社名も記します。[reprint] の後に [,] を付けることに注意。

(例)

¹² C. S. Lewis, *The Discarded Image: An Introduction to Medieval and Renaissance Literature* (Cambridge:

Cambridge University Press, 1964; reprint, 2004), 43.

¹⁸ Joseph Owens, *An Elementary Christian Metaphysics* (Milwaukee: Bruce Publishing Company, 1963; reprint, Houston: Center for Thomistic Studies, 1985), 83-84.

⁸⁷ Roger Scruton, *Modern Philosophy: An Introduction and Survey* (London: Sinclair-Stevenson, 1994; reprint, Penguin Books, 1996), 165.

別のタイトルで再版された著作の場合は、次のように記すことができます。

¹⁰⁶ Thomas Aquinas, *Light of Faith: The Compendium of Theology*, trans. Cyril Vollert (Manchester, NH: Sophia Institute, 1993); originally published as *The Compendium of Theology* (St. Louis: Herder Book Co., 1947), 109-8.

新たな序文など、何か新しいことが加わって再版されている場合は、そのことを付記します。

⁵⁴ Thomas Aquinas, *Commentary on Aristotle's Nicomachean Ethics*, trans. C. I. Litzinger (Regnery Company, 1964; reprint, with a foreword by Ralph McInerney, Notre Dame: Dumb Ox Books, 1993), III, lec. 16, 562.

著者や訳者が多数の場合は、et al. (*et alii* : その他) を用いて省略することができます。

(例)

⁸⁸ Boethius, *Tractates, De consolatione philosophiae*, trans. H.F. Stewart et al., The Loeb Classical Library, New Edition (Cambridge: Harvard University Press, 1973), xiv.

8-3. 雑誌論文の引用・参照

《和書の場合》

和文の雑誌に掲載されている研究論文は次の順序で記します。①著者の名前、②「題名」、③『雑誌名』、④雑誌の号数、⑤（発行年）、⑥引用・参照した頁。

学術雑誌の場合、発行者や出版者を記す必要はありません。

副題には「——」（全マイナス二つ）を用います（両側につける必要はありません）。

(例)

¹⁰ ハンス=ユージェン・マルクス「まことの神、まことの人——カルケドン公会議の論争」『日本の神学』39（2000年）23-24頁。

題名の中に「 」がある場合、『 』に変えずにそのまま「 」を用います。書籍名と間違えないためです。

(例)

⁴⁶ 西脇純「古代教会における「病者の塗油」『南山神学』25（2001年）19頁を参照。

《洋書の場合》

洋書の雑誌に掲載されている研究論文は次の順序で記します。①著者の名前、②“題名”、③雑誌名（イタリックにする）、④雑誌の号数、⑤（発行年）、⑥：の後に引用・参照した頁。

頁に p. を記す必要はありません。「名前、苗字」の順番で著者名を記します。

副題には〔:〕を用います。頁番号の前に〔:〕を付けることに注意。

（例）

³² Robert Sokolowski, “Knowing Essentials,” *The Review of Metaphysics* 188 (1994): 699.

³² Charles Curran, “The Third Way: An Existential Reconstruction,” *Proceedings of the American Catholic Association* 46 (1972): 89.

題名の中に “ ” がある場合は、 ‘ ’ に変えます。

（例）

⁴⁷ Denis J. M. Bradley, “‘To Be or Not To Be?’: Pasnau on Aquinas’s Immortal Human Soul,” *The Thomist* 68 (2004): 37-38.

週刊誌の場合は、発行日も記します。

（例）

⁴⁷ Christine Gorman, “Why We Sleep,” *Time*, January 24, 2005, 30-33.

8-4. 論文集の中の論文の引用・参照

《和書の場合》

論文集の中の論文の場合は、次の順序で記します。①著者の名前、②「題名」、③編集者名、④『論文集の名』、⑤（出版社、発行年）、⑥引用・参照した頁。

（例）

⁷⁹ 稲垣良典「トマス・アキナスの社会思想——共通善概念を中心に」、上智大学中世思想研究所編『中世の社会思想』（創文社、1996年）134頁参照。

編者が多い場合は「他」という語を用いて省略することができます。

（例）

¹⁶ 大森正樹「グレゴリオス・パラマスと哲学——ヘシカスムの伝統との関連において」、K. リーゼンフーバー・山本耕平・他編『中世における知と超越』（創文社、1992年）288-89頁。

《洋書の場合》

論文集の中の論文の場合は、次の順序で記します。①著者の名前、②“題名”、③ **in** 編集書名（イタリックにします）、④ **ed.** 編集者名、⑤出版地：出版社、出版年）、⑥引用・参照した頁。

ed. の位置に注意。この場合は編集者の前に付けます。

(例)

³⁴ Kevin White, “Aquinas on the Immediacy of the Union of Soul and Body,” in *Studies in Thomistic Theology*, ed. Paul Lockey (Houston: Center for Thomistic Studies, University of St. Thomas, 1995), 251-52.

⁶⁴ John F. Wippel, “Metaphysics,” in *The Cambridge Companion to Aquinas*, ed. Norman Kretzmann and Eleonore Stump (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), 116.

編者が多数の場合は、**et al.** [*et alii*] と **eds.** (**ed.** の複数形) を用いて省略することができます。

(例) G.S. Kirk et al. eds., *The Presocratic Philosophers*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), 165.

8-5. 辞典の項目の引用・参照

s.v. (**sub verbo**) という略号を用います。項目の著者が記されている場合は、和書の場合は () 内に、洋書の場合は **by**～ で記します。

(例)

⁴⁴ 大貫隆・名取四郎・他編『岩波・キリスト教辞典』(岩波書店、2002年)、**s.v.** 「言語行為論」(宮本久雄)を参照。

⁹⁸ H. クラフト『キリスト教教父事典』水垣渉・泉治典編(教文館、2002年)、**s.v.** 「グレゴリウス、ニュッサの」。

²⁴ Roy Deferrari ed., *A Lexicon of St. Thomas Aquinas* (Washington, DC: Catholic University of America Press, 1948), **s.v.** “univoce.”

⁸⁷ Cf. Angelo Di Berardino, *Encyclopedia of the Early Church*, trans. Adrian Walford (Cambridge: James Clarke & Co., 1992), **s.v.** “portrait,” by D. Mazzoleni.

8-6. 新聞の記事の引用・参照

日本の新聞の場合は、新聞名、日付、朝刊・夕刊を () に入れます。

記事の著者が記されている場合は、著者名も記載します。

(例)

⁴⁶「窓ごしに万博見えた——リニモ開業」(朝日新聞、2005年3月7日朝刊)、27面。

⁸⁷Mike Royko, "Next Time, Dan, Take Aim at Arnold," *Chicago Tribune*, September 23, 1992.

英語の新聞の表記方法については、Turabian, 17.4 を参照。

8-7. 卒業論文の引用・参照

出版されていない卒業論文、修士論文、博士論文を引用・参照するときは、次のように表記します。〔Ph.D.は「博士」(Philosophiae Doctor = Doctor of Philosophy)、diss.は「学位論文」(dissertation)の略語です。〕未公開の論文は著書とは違い、題名を『 』にいれたりイタリックにしたりしません。

(例)

²²小林愛理「キリスト教の精神と人間の尊厳——マザー・テレサに学ぶ」(南山大学・人文学部キリスト教学科、卒業論文、2004年)、47頁を参照。

²³Andrew Murray, "Intentional Species and the Identity Between Knower and Known According to Thomas Aquinas," (Ph.D. diss., Washington, DC: The Catholic University of America, 1991), 61-62.

出版されている博士論文や修士論文は、著書として扱います。

(例)

¹⁵⁸Jun Nishiwaki, *Ad nuptias Verbi: Aspekte einer Theologie des Wortes Gottes bei Ambrosius von Mailand*, Trierer Theologische Studies, Band 69 (Trier: Paulinus Verlag GmbH, 2003), 321-22.

8-8. インターネット上の記事の引用・参照

インターネット上の記事や情報は一時的で不安定なものが多いため、原則的に典拠として用いるべきではありません。しかし、インターネットから論文を入手したり、記事を引用・参照した場合には、参照した年月日も明記して、次のように記します。

(例)

⁵⁶「シナピス難民ニュース」2005年2月18日版、難民移住移動者委員会、カトリック大阪大司教区・シナピス教区センター・ホームページ〈<http://www.osaka.catholic.jp/sinapis/>〉、(参照 2005-03-09)。

¹⁸秋山征夫「画像解析による酒米心白の評価」長岡技術科学大学、1997、博士論文、(オンライン)、入手先:長岡技術科学大学博士論文データベース〈<http://nalib.nagaokaut.ac.jp/>〉、(参照 2000-03-29)。

詳しくは、「科学技術情報流通技術基準」〈<https://jipsti.jst.go.jp/sist/>〉を参照。

9. 同じ文献を何度も引用・参照する場合

同じ文献の同じ箇所を連続して引用・参照する場合は、「同上」あるいは「同書」と表記できます。「Ibid.」と表記することもできます（Ibid の最後に省略を示す [.] があることに注意）。

(例) ²⁸ 同書、112 頁。

(例) ³² 同上。

(例) ⁴¹ Ibid.

(例) ¹² Ibid., 46.

しかし、註を含む文章の切り貼り作業によって出典箇所が行方不明にならないように、論文作成の最後の段階まではこの表記を用いないことをお薦めします。

連続してではないけれども、すでに引用・参照した文献を再び引用・参照する場合は、著者名あるいは文献の題名を省略して表記することができます。最初に引用・参照したときに〔以降は～と略記する〕（[hereafter, ～]）と付記します。

(例)

²⁶ 佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』（創文社、2004 年）〔以降は『殉教研究』と略記する〕、210 頁。

↓（次回の引用から）

²⁹ 佐藤『殉教研究』、220 頁。

⁵¹ Anton C. Pegis, *St. Thomas and the Problem of the Soul in the Thirteenth Century* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1934; reprint, 1983) [hereafter, *Problem of the Soul*], 61-62.

↓

⁵⁶ Pegis, *Problem of the Soul*, 67.

ただし、容易に原題が分かる場合には、「以降は～と略記する」と付記する必要はありません。

(例)

⁵¹ Jaroslav Pelikan, *The Christian Tradition: A History of the Development of Doctrine*, vol. 4: *Reformation of Church and Dogma (1300-1700)*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1984), 251.

↓（次回の引用から）

⁵⁵ Pelikan, *The Christian Tradition*, 4, 255-56.

²⁸ 中川純男『存在と知——アウグスティヌス研究』（創文社、2000 年）、146-147 頁参照。

↓（次回の参照から）

³⁰ 中川純男『存在と知』、149 頁参照。

使用文献中に、たとえば中川という同じ姓の別の著者がいない場合は、名前も省略できます。

³⁰ 中川『存在と知』、149 頁参照。

ある著者の著作を一種類しか引用・参照に用いない場合は、2 回目以降は著者名だけを表記することもできます。「以降は～と略記する」と記す必要もありません。

(例) ³⁰ 中川、149 頁参照。

ある著者の著作を一種類しか引用・参照に用いない場合には、*op. cit.* や *loc. cit.* あるいは「前掲書」という表記を用いることもできますが、上 (7-4 参照) にも述べたように、最近はあまり用いられない傾向にあります。

(例)

³⁰ 宮本、前掲書、74 頁参照。

³¹ Collins, *loc. cit.*, 167.

使用する文献が少数で、まぎらわしくなる恐れがない場合は、各文献の詳細は「文献表」のみに記して、本文中では、はじめから省略した著者名と題名を用いることもできます。また、同じ著者の複数の文献を引用・参照する場合は、題名を用いる代わりに著作年を表記して区別することもできます。そうする場合は論文中のすべての引用・参照をその書式に統一すること。

(例)

²⁶ 江川「断食問答について」、9 頁。

²⁷ 江川「もうひとつのたとえを聞きなさい」、12 頁。

²⁸ 鳥巢 (2003 年)、46 頁参照。

²⁹ 鳥巢 (2004 年)、87 頁参照。

10. 文献表

10-1. 順序

文献表の表記の仕方は、註における表記の仕方と少し異なるので注意が必要です。

著作を並べる順番を、あいうえお順、アルファベット順、著作年順のいずれかに決めます。

特定の著者の思想について研究をした場合は、文献表を次のように分けて記載します。

(1) テキスト

(a) 原典

(b) 翻訳

(2) 研究論文

(a) 洋書・欧文の研究論文

(b) 和書・和文の研究論文

10-2. 書式

《和書の場合》

和書・和文の研究論文の場合は、脚注における書式とほぼ同じです。

各著作の間を一行あけます。

雑誌の論文・記事、および論文集中の論文の場合は、掲載されている最初と最後の頁を記します（巻末註の頁も含めます）。

同じ著者の複数の著作を並べて記すときは、著者名の代わりに、全角4スペース分の下線を引きます。著作は、あいうえお順、アルファベット順、あるいは著作年順に並べます。

「ぶら下げインデント」にすると、きれいで見やすくなります。

「ぶら下げインデント」というコマンドを「クイック アクセス ツール バー」に追加しておくとう便利です。追加の方法は、①「ファイル」の下のほうにある「オプション」をクリックします。

②「クイック アクセス ツール バー」を選び、「すべてのコマンド」の中から「ぶら下げインデント」と「ぶら下げインデントの解除」を「追加」ボタンを押して追加します。OK ボタンを押して終了します。以上です。これで Word の一番上の部分の「クイック アクセス ツール バー」に新たに2つのボタンが加わります。

（ぶら下げインデントを使用した例）

佐藤研「宗教史学派のイエス像」、大貫隆・佐藤研編『イエス研究史——古代から現代まで』（日本基督教団出版局、1998年）、154-163頁。

ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』、叢書・ユニベルシタス 236、渡辺香根夫・内田洋訳（法政大学出版局、1988年）。

（著者名を省略し、下線で表した例）

浜口吉隆『キリスト教からみた生命と死の医療倫理』（東信堂、2001年）。

_____ 『伝統と刷新——キリスト教倫理の根底を探る』（南窓社、1996年）。

《洋書の場合》

洋書・欧文の論文の場合は、脚注と文献表とでは書式が異なるので注意しましょう。

著者名は、「苗字、名前」の順番で記します。（名前と苗字の区別のない古典的著者は慣例に従います）。

著者が2人以上いる場合は、2番目以降の著者の名は「名前・苗字」の順番で記します。

項目の切れ目にはコンマ [,] ではなくピリオド [.] を用います。

翻訳者・編者は略号ではなく、「Translated by～」、「Edited by～」で表記します。

ただし、編集者が見出しになる場合は、略号 ed. で表記します。

論文集中の論文の場合は、 pp. を用いて該当頁を記します。
出版地・出版社・出版年は（ ）に入れません。

同じ著者の著作を並べて記すときは、著者名の代わりに、半角 8 スペース分の下線を引きます。下線の最後にピリオド (.) を付けます。著作はアルファベット順に並べます。

「ぶら下げインデント」(Hanging indention) にすると見やすくなります。

「ぶら下げインデント」のコマンドを追加する方法は、上の《和書の場合》を参照。

(例)

Aristotle. *The complete Works of Aristotle*. The Revised Oxford Translation. Edited by Jonathan Barnes. 2 vols. Bollingen Series LXXI-2. Princeton: Princeton University Press, 1984.

Ashley, Benedict M. "Aquinas and the Theology of the Body." In *Thomistic Papers III*, pp. 55-89. Edited by Leonard A. Kennedy. Houston: Center for Thomistic Studies, 1987.

Bonaventure. *Disputed Questions on the Mystery of the Trinity*. Translated by Zachary Hayes. Vol. 3 of *Works of St. Bonaventure*. Edited by George Marcil. St. Bonaventure, NY: The Franciscan Institute, St. Bonaventure University, 1979.

Davies, Brian ed. *Thomas Aquinas: Contemporary Philosophical Perspectives*. New York: Oxford University Press, 2002.

Gracia, Jorge J.E. and Timothy Noone ed. *A Companion to Philosophy in the Middle Ages*. Blackwell Companion in Philosophy. Malden, MA: Blackwell Publishing Ltd., 2003.

Hilbert Gils. "The Nature and Immortality of the Soul According to St. Thomas." *Philosophical Studies* 16 (1967): 46-62.

Kawaura, Sachiko. *Pilgrimage to Memories: An Exploration of the Historically Situated Ecological Self through Women's Narratives*. Kyoto, Japan: Nakanishiya Shuppan, 2003.

Owens, Joseph. *An Elementary Christian Metaphysics*. Milwaukee: Bruce Pub. Co., 1963; reprint, Houston: Center for Thomistic Studies, 1985.

Rousseau, Mary F. "Toward a Thomistic Philosophy of Death: The Natural Cognition of the Separated Soul." Ph.D. diss., Milwaukee: Marquette University, 1977.

Thomas Aquinas. *De potentia*. In *Quaestiones disputatae*, vol. 2, pp. 1-276. 10th ed. Edited by M. Calcaterra and T.S. Centi. Turin: Marietti, 1965.

_____. *Summa Contra Gentiles*. Translated by Anton C. Pegis, James F. Anderson, Vernoon J. Bourke, and Charles J. O'Neil. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1975.

Wawrykow, Joseph P. "On the Purpose of 'Merit' in the Theology of Thomas Aquinas." In *Medieval Philosophy & Theology*, vol. 2, pp. 97-116. Edited by Norman Kretzmann. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1992.

11. 目次における頁番号の付け方

目次の項目には、各項目の後に線（点線）を引き、右端に頁番号をつけます。

目次は、Word のメニュー「参考資料」の中にある「目次」という機能を使って作成できます。しかし、その使い方がよく分からない場合は、次の方法で頁番号を右端につけることができます。

右端の頁番号までの線（点線）は、

第一章 南山精神	5
第一節 人間の尊厳	12

というように、単に点（上のはカナの中丸点）を打つだけでも一応書けます。しかしこれでは、残念ながら頁番号がきれいに右揃えになりません。そこで、次の機能を用います。

まず「タブとリーダー」というコマンドを追加します。追加の方法は、①「ファイル」の下の方にある「オプション」をクリックします。②そして「クイック アクセス ツールバー」をクリックし、「コマンドの選択」から「すべてのコマンド」を選びます。③その中から「タブとリーダー」を選び、「追加」ボタンを押して追加します。OK ボタンを押して終了します。これで「クイック アクセス ツールバー」にボタンが加わります。

《各項目の頁番号のつけ方》

1. 項目と頁番号を、まず書きます。（例えば、第一章 南山精神 5）
2. 「表示」の中の「ルーラー」をオンにします。ルーラーの左上の端にあるタブマークを何回かクリックして「右揃えタブ」(☐) に変えます。そしてルーラーの文書範囲内の右端あたりの数字の下部をクリックして、そこに「右揃えタブマーク」(☐) を付けます。
3. 項目と頁番号の間にカーソルを置きます。（例えば、第一章 南山精神 | 5）
4. 上で追加した「クイック アクセス ツールバー」の「タブとリーダー」をクリックします。
5. 「タブ位置」に、先ほど付けた「右揃えタブマーク」の位置が表示されています。
6. 「配置」の「右揃え」を選びます。
7. 「リーダー」の選択肢の中から、好きな線を選びます（ここでは例として 5 番の点線を選ぶことにします）。
8. 「OK」を押して本文に戻り、キーボードのタブ・キー [⇧] を押します。

9. すると、まるで魔法のように点線が現れて、頁番号が右にみごとに揃います。頁番号の位置は「右揃えタブマーク」(☐) をドラッグすることによって動かし調整することができます。

(例)


第一章 南山精神	5
第一節 人間の尊厳	12

12. 第4頁目から頁番号を付ける方法

卒業論文は次の順番で構成されます。

- (1) **表紙**：「南山大学〇〇〇〇年度卒業論文」の下に「題目」「指導教員の名前」「自分の学生番号と名前」を書きます。
- (2) **要旨**：この頁は『要旨集』に載りますので、題目と自分の学生番号と名前をここにも書きます。
- (3) **目次**
- (4) **本文**：この頁から頁番号1を付けます。
- (5) **文献表**

「本文」から頁番号1が始まるように設定します。表紙、要旨、目次がそれぞれ1頁ずつの場合、本文は第4頁目から始まることとなりますので、第4頁目から頁番号1を付けることとなります。以下は第4頁目から頁番号1が始まるように設定する方法です。

- (1) 卒論全体を「第1頁～第3頁」と「第4頁以降」の2つのセクションに区切ります。3頁目の最後の行にカーソルを置き、「レイアウト」の中の「区切り」ボタンを押し、「セクション区切り」→「次のページから開始」を選びます。これで「第1頁～第3頁」と「第4頁以降」2つのセクションに区切られます。確認したい場合は「ホーム」の「段落」の中の「編集記号の表示・非表示」ボタンを押しします。
- (2) セクション2となった第4頁にカーソルを置いて、「挿入」の中の「フッター」ボタンを押し、「フッターの編集」を選びます。するとフッターの場所の右端に「前と同じ」という文字が現れます。上のメニュー（「ヘッダーとフッター」）の中に、「前と同じヘッダー/フッター」というボタンがありますから、それを押してオフにします。「前と同じ」が消えます。
- (3) フッター セクション2の中にカーソルがある状態で、上のメニュー（「ヘッダーとフッター」）の左のほうにある「ページ番号」ボタンを押し、「ページの下部」→「番号のみ2」（すなわち下部中央）を選びます。これで頁番号が付きました（この段階では4と表示されます）。
- (4) 次に、この頁番号を1に変更します。先ほどと同じ「ページ番号」ボタンを押し、「ページ番号の書式設定」を選びます。そして「開始番号」を1に変更します。
- (5) 上のメニューの右のほうにある「ヘッダーとフッターを閉じる」ボタンを押しして終了します。これで完了です。

以上。